

| | |
|------------------|---|
| Title | 朝日討論会(1946～50年)における「ディベート」観の二極：我が国における「ディベート」観形成初期の実際 |
| Author(s) | 熊谷, 芳郎 |
| Citation | 聖学院大学論叢, 22(1): 121-135 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=1807 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極 ——我が国における「ディベート」観形成初期の実際——

熊谷芳郎

Polarization in the Asahi Touron Kai debate: The Actual View of Debate in Japan

Yoshirou KUMAGAI

The planning of the Asahi Touron Kai was complicated by two extreme and opposite views. One was the view of “thought pursuit type” that regarded Touron as one method employed in the pursuit of thought. The other was the view of “the game type,” in which Touron was regarded as more of a pastime than a serious intellectual pursuit. This polarization of views, due partly to constraints imposed by the post-World War II era, continues today. However, the Asahi Shimbun placed the “discussion” of these opposing views within the parameters of “the technical basics of democracy,” a placement consciously recognized and commonly accepted by the leaders of Japan. Therefore, this form of the Asahi Touron Kai encapsulates and emblemizes the spread and development of post-war democracy in Japan.

Key words: 討論, 弁証法, 思考, ゲーム

問題の所在

1947年～1950年に「全国大学高専朝日討論会」（以下は「朝日討論会」と略称する）が開催された。この「朝日討論会」は全国大会決勝がNHKラジオによって全国に放送され⁽¹⁾、また、当時の「討論」を扱った幾つかの著書に紹介された⁽²⁾ほか、高等学校の国語教科書にも「ディベート」の紹介記事の中で「わが国の朝日討論会はこの形式のものである」と記述されるに至る⁽³⁾。したがって、本討論会における「討論」は、1980年頃から我が国に移入された「ディベート」の先蹤であると歴史的に位置づけることができよう。

「朝日討論会」に関する基本的な文献は以下のものである。

執筆者の所属：人文学部・日本文化学科

論文受理日 2009年7月22日

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極

- ① 『討論—理論と実践』朝日新聞社・後醍醐院良正編集発行，1947年5月31日発行，B6版，総ページ数182ページ。
- ② 『討論—理論と実際—』朝日新聞社企画部編，中央社，1948年10月10日発行，B6版，総ページ数182ページ。
- ③ 『改訂朝日式・討論法の解説と指導』冠地俊生著，日本辯論學會，1952年10月27日発行，B5版，総ページ数342ページ。
- ④ 「朝日新聞」同縮刷版

②は①の5名羽仁五郎・蠟山政道・岩上順一・坂西志保・鈴木安藏の論文のうち，羽仁五郎・蠟山政道・鈴木安藏の論文をそのまま掲載しており，さらに「決勝講評」と題した蠟山政道の文章を載せている。したがって，②は，2回の「朝日討論会」の実施を踏まえて，①を改版したものと捉えることができる。本論では，両書に共通する記事を引用する場合には，①から引用する。

③は当時朝日新聞社企画部に勤務していた冠地俊生によるものである。「朝日討論会」の企画に関して、「まず，私から社会部饗田三吉次長にこの企画を有楽町で一杯呑みながら売込む。それを彼が翌日さらに企画部加藤大吉次長に転売する。そして，企画部長大島泰平氏がとりあげて朝日新聞社の事業に正式決定するという順序で事が運んだ。」⁽⁴⁾と述べており，冠地は朝日新聞社企画部にあって，「朝日討論会」の企画運営に中心的な役割を果たしたと考えられる。

本論文では対象を「朝日討論会」の指導者における「討論」観に焦点化する。なぜなら，彼らの間には，「討論」の理解に思考追求型とゲーム型とがあり，その「討論」観の相違が「朝日討論会」の消滅にもつながったと考えられるからである。そのように「討論」の理解が「二極」に分れたところに，当時のディベート撰取の時代的特性を見ることができる。本論文では，その「二極」を同じ「討論」という語で名づけたところに「朝日討論会」が孕んだ課題がある，という仮説を提出する。

さらに，「朝日討論会」を中心とした戦後初期におけるディベート運動について研究することは，これから求められるべき，日本人の公共性の能力育成に向けて，ディベート教育を普及発展させる可能性を探ることに道を開くであろう。

1 考察の前提

1-1 「朝日討論会」の内容

ここでは「朝日討論会」のおよその内容を確認しておきたい。

朝日討論会はあらかじめ提出された討論課題について，肯定，否定の両側にたつたチームが

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極

交互に聴衆に意見を発表する。その結果を審判員が判定基準にもとづいて優劣（勝敗）を決定するいわば討論試合であつて、チーム同士の討論であり発言に持時間の制限があるのがこの討論会の特色である⁽⁵⁾。

と①にあり、現代のディベートとほぼ同じ形式のものである。参加対象は「大學、高等學校、専門學校（男女）一校一チームの出場とし、総合大學においては豫科、専門部、女子部その他文部省令による独立校」とある⁽⁶⁾。

1-2 資料①②と「朝日討論会」との位置づけ

①の「はしがき」において、「討論」および「朝日討論会」について次のように述べている。

朝日新聞社が、このデモクラシーの技術的基礎を廣く全國に普及し、討論教育の向上をはかるため、全國大學高専「朝日討論会」を計畫し第一回の成功を収めたことは、まことに時宜に適した成果というべきであつた。同討論会が年中行事として繼續されるにあたり、わが出版局は、討論の歴史・理論・實際について各専門家の執筆をねがい、あわせて第一回討論会の報告を編集し、討論全般の理解に役立つ一書を江湖におくらんとするものである⁽⁷⁾。

以上の記述から、同書の目的が「朝日討論会」の普及にあることは間違いない。「朝日討論会」の理論的な裏づけとして本書が書かれたと考えられる。さらに、朝日新聞社が当時の「専門家」と捉える人物に執筆を依頼していたことから、ここに執筆している人物が、少なくとも表面的には「朝日討論会」を指導推進していた人物と捉えることができる。

したがって、以上の理由から、①およびその増補改訂版としての②両書に掲載された論文の内容を吟味することは、「朝日討論会」の指導推進者たちが目指していた「討論」の内容を確認することになる。

2 各討論観についての考察

本論では、①②に論文を掲載している蠟山政道と、①に掲載している坂西志保、および③の冠地俊生の論考を中心に、「朝日討論会」の指導者におけるそれぞれの「討論」観について考察を進める。

2-1 蠟山政道「眞實の探求としての討論」

蠟山政道は第一回「朝日討論会」全国大会が行われる5日前に「朝日新聞」紙上に「學生討論会の眞意義」と題した論文記事を発表しており、「朝日討論会」の運営において中心的な存在であった

と考えられる人物である。①所収論文の冒頭で次のように述べている。

デベート（討論）ということはディスカッション（議論）という一つの社会現象の或る一つの在り方、もしくは或る狭い仕方または型態であるといえよう。言葉を代えていうと、討論というものがどういうものであるかを知るためには、それよりもつと廣い議論というものが、どういうものであるかを知ることから始めねばならぬ。議論というものが行われぬ、また許されぬところでは討論というものは考えられない⁽⁸⁾。

その討論というものがどうして起り、どういう目的に用いられたかを考えてみる必要がある。換言すれば、眞實の探求という目的に對する手段としての討論ということが考察されねばならぬ⁽⁹⁾。

ここでは、「討論」と「議論」の定義が述べられているが、ディベートを一つの「手段」と位置づけつつも、「眞實の探求」というディベートの目的を明示している点に注目したい。単なる「手段」ではないというのである。

とはいえ、引用文の直後に「政治上の手續又は技術として行われている討論——議會や會議における討論⁽¹⁰⁾」という使い方もあり、現代の「ディベート」よりもやや広く捉えている例もある。しかし、ここでは、先の定義をそのままに、「討論」とは「デベート」のことであるというものを蠟山の定義としておく。このような討論の捉え方を「思考追求型」と名づける。

討論が「眞實の探求という目的に對する手段」でなければならないことを説明するために、蠟山は「對話」（dialogue）と「辯證法」（dialectic）とを例に出しながら論を展開していく⁽¹¹⁾。具体的な例としてはソクラテスの「問答」法が挙げられている。すなわち、「討論」にも「對話」にも「辯證法」が用いられる中で「眞實の探求という目的に對する手段」となることができるというものである。この「討論」と「辯證法」（dialectic）とを接近させて捉える姿勢は、同時に掲載されている羽仁五郎にも近いものがある。

さらに、蠟山は「討論」と「辯證法」（dialectic）との関係を具体的に次のように説明している

討論は二つの方向を辿る。その一つは、それが單に機智の闘いといったようなものとなり、對決者の中で巧みな者がそうでない相手より分がよい、つまり勝つという結果となる。その場合には「正」も「反」もそつちのけとなり、ただいづれかが勝つたというだけのことである。アリストパネスが「雲」の中で確かに悪意をもつてソクラテスを諷したのは、こうした討議のことなのである。辯論の目的は道徳的によくない言い分をもつともらしくみせることだという意味にとつて、それをソクラテスに轉嫁したのである。それでは全く茶番狂言である。

ところで、今一つ辿る道がある。それが、ソクラテスの信じ且つ実行したところである。それは對話者又は對決者が眞實を探求すべく協力することである。すなわち「正」に對する反對理由の或るものは立派に根據のあることが確かめられる。そこで両者が互いに各自が部分的に正しくもありまた間違っていることを納得する。そうすると最後には「正」でもまた「反」でもない新しい立場が生まれる。それは両者の正當な部分に對してそれを認めるのである。この新しい立場は両者のどうにもならない矛盾を克服してそれを合一する。従つて、それはジンテーゼ（合）と呼ばれるのであるが、その「合」への論理的過程が知識の展開であり、従つてそれが眞理探求の手段と看做されるのである。

こういう辯證法的對話は確かに眞實の探求手段として意識的に用いられ得るし、また用いられたのである。プラトンの對話篇が今日まで全世界の人々に讀まれ、津々たる興味と共に深遠な哲理を備えているのもそのためである⁽¹²⁾。

蠟山の「討論」を現代の「ディベート」と捉えた上で、その「討論」の説明としてこの部分を読むと大きな疑問が残る。それは、ディベートにおいて「〔合〕への論理的過程」とは何を指すか、という点である。ディベートの後において、ディベートで追究された問題に関して改めて話し合うというのなら分かるが、ディベートの最中に弁証法的発想により「合」に達することは不可能ではないだろうか。蠟山自身、このような「辯證法的對話」を表現の上で「對話」とは受けても「討論」とは受けていない。しかしながら、「討論は二つの方向を辿る」というその一つの方向として語られているところに、問題がある。

その後、蠟山は読書と比較して、討論の利点を説明していく。

討論は読書によつては得られない長所を有つている。それは思惟の直接連想の及ぶ範囲が非常に擴大するという点である。一人だけの思惟においては、その考える人にとつて或る有望な觀念が心の中にはいつてくるまで、つまり問題への態度を決するまで待つて、しかる後に次ぎの觀念が生まれてくるまでそこに氣をとどめていなくてはならない。しかるに、一群の人々の間で討論が行われる場合は、ウオラスの言葉に従えば、臘犬の群のように、その中の誰にでも浮んだ最も有望な觀念に皆がついていくのである。その場合の辯論の秩序の法則が大切であつて、順番をきめてやる方法の誤つてゐることは明きらかだが、自由に口をさしはさませるやり方も注意しないと、ソクラテスのいわゆる觀念の流産 (miscarriage) を惹起する危険がある。ここに討論術も個人的思惟の内省から得られる證據について學ぶ必要がある。討論の主題に最も関連のある、従つて有望な觀念の有つ関連性の認識を可能又は容易ならしめるような組織的な技術が考案されねばならないのである。それは社會心理學の大きな研究課題であらう⁽¹³⁾。

ここでは、読書と討論という具体的な例を比較することを通じて、個人の思考と集団の思考とを比較検討している。その結果、討論では「ウオラスの言葉に従えば、臘犬の群のように、その中の誰にでも浮んだ最も有望な観念に皆がついていく」ということになる。しかしながら、これを可能にするための方法としては現代の「ディベート」のような方式がはっきりと否定されている。

この後、蠟山は次のように論を締めくくる。

リンデマンの説明は、もはや眞實の探求手段としての討論ではなく、経済問題や社会問題の解決手段としての技術として組織的又は方法的に工夫されている討論である。しかし、その内面的な心理的論理的過程の構造は、學問眞理の探求過程を包容しているものであり、従つてそれは教育過程として訓練されるべきものであることは明らかである。今日、わが國で始められつつある學生の討論會などが、一時の流行でなく、またゾヒースト的な辯論渡世術に墮さぬよう、まして一種の茶番狂言にならぬよう教育的又は學問的の効果をもつようになるためには大いに考究に値する提要であろう。いな、一步をすすめて、われわれはアリストテレースが論理學を構成したときに前提条件としたような、種々の心理的な考慮を明確に意識するような教育的訓練から始める必要があるかも知れない⁽¹⁴⁾。

ここでは、討論を「學問眞理の探求過程」としてさらなる形態を求める姿勢が打ち出されている。

このように、討論を「學問眞理の探求過程」としてとらえる姿勢は、蠟山が第一回全国大會を前に発表した署名記事にも、次のように明示されていた。

最後に、學生討論會として、肯定、否定の何れをも含めて全体として大切なことは、討論をして眞實の探究の手段たらしむることである。何れが討論によつて勝つたかは重要でない。討論によつて証明されたことは何であり、また証明されなかつたものは何であるかを明らかにすることが大切なのである。肯定にせよ、否定にせよ、ただ單に勝つことが目的でない。それは討論の邪道である。それは教育的に見てもよくない。學生討論會をして健全に發達せしめるために、討論會をしてこの邪道に陥らしめないようにしたい⁽¹⁵⁾。

ここでは、「ただ單に勝つこと」を目的とすることは「討論の邪道である」としている。そして、「朝日討論會」を「この邪道に陥らしめないようにしたい」と述べている。

2-2 坂西志保「アメリカの討論會」

坂西志保は①所収論文「アメリカの討論會」の冒頭において、次のように述べている。

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極

討論會は一つのゲームである。したがってそれに参加するものはゲームの掟というか、規則を知らなければならない。

私たちはよくパーリアメンタリー・デベート（議會討論）というのをきくが、これは今日普通に行われている討論會とは型がちがう。もちろん後者は前者から發足したもので、一つの問題についてその是非を討論する議員の知的攻防戦をならつて、これにはつきりした形を與えたものである。

討論が演説と間違えられ、討論會が辯論會になつた例もあるが、これは討論がまだ日本人に本質を理解されていないからである。普通にいうディスカッション（議論）ともちがう。これは意見の交換が主となつて、審判員もいないし、肯定、否定と二つに別れていない。途中で意見をかえてもよい。言い換えればこれはゲームではない。

ゲームである以上は競争であつて、勝つことが最終目的である。したがって、参加するものの能力を試す事になるので、與えられた課題を議して、その眞偽を追求するためではない。もちろんよい討論會は問題の焦點を明らかにして、聽衆を説服するかも知れない。然し、それは副産物で、當面の目的ではない。攻勢側と守勢側がしのぎをけずつて戦うのであるから、自分達に有利な點は何處までも強調し、誇張する。不利な點は避けて、よしそれに及んでもなるだけ軽視する。相手につかまれないよう、三段の構えで行くのである。

朝日討論會の時、審判員の一人が「この問題は學生達が大體支持しているのであるから、否定側にたつものはないであろう」といつたので、私は「おやおや、審判員から教育していかなければならない」と思つた。自分の所信を論ずるのでなく、テクニク（技術）で相手側議論を倒せばよいのであるから、問題を支持していても、いなくてもそれとはなんの關係がない。充分な用意をして、討論する題について研究し、知つていればよいのである⁽¹⁶⁾。

ここでは、討論を「一つのゲームである」と規定し、その目的については「勝つことが最終目的である」としている。さらに、「その眞偽を追求するためではない」とまで述べている。このような討論の捉え方を「ゲーム型」と呼ぶこととする。

上に続けて、アメリカの中等学校における討論のもたらす効果を次のように示している。

中等學校では大體知的訓練をめざしているのです、出来るだけたくさんの學生に参加させ、實際問題を中心としている。たとえば、試験を廢止すべし、軍隊的訓練の可否、社會、戀愛問題、宗教、道德に關するもの等が多く、聽衆も自分達に關係のあるものであるから、熱心に出てくる。問題の可否を論じている間に、その實體をつかむことが出来るから、専門家の講演よりも効果があるという⁽¹⁷⁾。

つまり、討論は「問題の可否を論じている間に、その實體をつかむことが出来る」ものだという。この意味では蠟山がいう「學問眞理の探求過程」という討論の意味づけに近いものを感じるが、しかしそれは「専門家の講演よりも効果がある」といわれているように、どちらかといえば聴衆にとって意味のあることとされているものである。先の引用でも「もちろんよい討論會は問題の焦點を明らかにして、聴衆を説服するかも知れない。然し、それは副産物で、當面の目的ではない。」と述べていた。

では、坂西は日本人が討論を学ぶ意義をどのように捉えていたのだろうか。それに関する以下の記述がある。

討論は大なり小なりいろいろな形でアメリカの生活に織り込まれている。人間が卑屈になっていないから、意見を持つている。持つていればそれを發表する。アメリカ人はよく議論のための議論をする。私がこれはよいといえば、賛成していても一應反對の意見を出す。先にいつた室内遊戯である。そして勝敗を決めるのである。

意見がないのは淋しい。心と知識との貧困が困をなしているからである。あつてもいわないのは、腹ふくるる思いでよくない。舌三寸のかわりに鐵拳を食わせるのは野蠻で、これはやめなければならない。するとどうしてもアメリカ人のいう立つて考えることができるようにならなければならない。討論が是非必要になつてくる。民主主義の一年生は謙虚な氣持で討論のABCから始めなければならない⁽¹⁸⁾。

坂西の論述を整理すると次のようになる。

- ① 討論は「一つのゲーム」であり、「室内遊戯」である。
- ② 討論は「競争」であつて、「勝つことが最後の目的」である。
- ③ 「よい討論會は問題の焦點を明らかにして、聴衆を説服するかも知れない」が「それは副産物で、當面の目的ではない」。
- ④ 民主主義には意見を持つことが必要だ。
- ⑤ 意見を持つためには討論を練習する必要がある。

坂西には、意見を持つことを重視する姿勢があるが、思考を深めることには言及しない。「意見を持つこと」と「思考を深めること」とは必ずしも一致しない。浅く未熟な思考に基づく意見であっても、ゲームとしての討論に勝つことは可能だからである。この点は蠟山と決定的に異なる点である。

以上のように坂西の考え方は蠟山政道のそれとかなり異なつたものであつたことが分かつた。

2-3 冠地俊生『改訂朝日式・討論法の解説と指導』

冠地俊生は「朝日討論会」をどのようなものと考えていたのであろうか。

この朝日式討論法は、試合討論（Competitive Debate）或いは討論試合（Debating Contest）と呼ばれているもので、討論とは一口にいつても、やや特殊な討論の部類に属し、普通のグループ・ディスカッションや、圓卓會議、ラジオ討論などとは別物である⁽¹⁹⁾。

ここでは、「朝日式討論法は、試合討論（Competitive Debate）或いは討論試合（Debating Contest）」だとされている。そして、「普通のグループ・ディスカッションや、圓卓會議、ラジオ討論などとは別物である」という。

また、その目的については次のように述べている。

理論闘争というものは、客觀的に冷静に判断されるとき、どんな場合に敗北しどんな場合に勝利するか、論理的な實證的なそして極めて嚴正な審判規定を立ててこれを若い世代に示し、その論戦の道標とすると共に、民主政治が基盤とする國民個々の論争批判の力を養うのである。そしてわが國の健全な民主政治の發展に寄與しようというのが、この朝日式討論法の目的である⁽²⁰⁾。

ここでも、「民主政治が基盤とする國民個々の論争批判の力を養う」という表現が登場する。当時、民主国家となるにあたって、「論争批判の力」を身につけた民主的な國民の育成が大きな課題であったことが分かる。その上で、討論について次のように述べる。

この討論法は、いかなる學説・主張・理論にも必ず長短明暗の両面があることを示唆する反面に、それらの學説・主張・理論に對して輕卒な賛否を下す前に、その長短両面を仔細に検討し、公平な妥當な結論を見出す習慣を養おうとするものである⁽²¹⁾。

青年たちは、いつの間にか、この「正」「反」「合」の辯證法的な物の考えかたが一つの習慣となり、如何なる主張に對しても冷静に長短の両面を見たのち慎重に判断を下し、かくして得た判断を始めて自己の意見として信念をもつて主張するし、その主張には責任をとるだけの自信をもつて來ようになるのである⁽²²⁾。

これにより、「朝日討論会」の企画はあくまでも発想・思考に重点をおいた企画であったことが主張されている。

その一方で、冠地は「代表的な戦術」「積極的に考えられる戦術」として次のような「討論」観を述べている。

どんな競技でも同じように、相手の虚をつく奇襲作戦ほど敵を制するのに効果のあるものはない。討論が戦術のための戦術に終始することは勿論戒められなければならない。われわれの討論が知性と品位のある堂々たる體當りの理論闘争でなくてはならないことは、すでに繰り返した通りである。しかし、その斗いの中にも、健全な戦術の工夫は必要である。従つてここでのべる所の“奇襲”戦術もその健全性を失わない範囲での工夫だと思つて貰いたい⁽²³⁾。

この他に「審判の判定法を研究せよ」と題して「審判がどんな風にメモをとり、どんな討論に動かされ、どんな討論から顔をそむけるか」といった「審判の判定方法を研究すること」の重要性が指摘された章では、審判規定を研究することが勧められている。

これらはどちらの論が正しいのかということとは別の次元の問題である。ゲームとして勝つための方法論と言えらるだろう。

さらに、本書全体の構成を目次の上で捉えると、「早口は慎め」「原稿の朗讀はいけない」など声言語で表現活動を行う場合には広く指導されるべき項目と、「審判の判定法を研究せよ」「相手の攻撃に釣られるな」「陥穽」などゲームとしての注意すべき事項とに二分されている。一方、思考そのものについては章を設定して論述してさえいない。もちろん、討論そのものに集中することが、結果として「日頃物を考える頭の使い方を自然のうちに実行させることになる」のであって、「いつの間にか」身につけると表現したのはそのためだという解釈もできよう。しかしながら、討論の目的を「辯證法的な物の考えかたが一つの習慣と」して身につけることだとしながら、それについて章立てをして説明することをせず、その一方でゲームとしての項目を詳述していることには疑問が残らざるを得ない。

以上のような冠地俊生の論述と坂西志保の論述との間に、筆者は響きあうものを感じるのである。そうであるなら、「朝日討論会」の指導運営者の中には、討論を「思考追求の方法」の一つと捉えるグループと、「一つのゲーム」と捉えるグループとが存在したことになる。

2-4 鈴木安藏「討論の意義と審判について——第一、第二大會をかえりみて——」

このような討論の捉え方に対するズレの存在を推測させるものとして、ここで鈴木安藏の論述を取り上げたい。鈴木は次のように述べている。

参加するものが必然に修得するところの以上のよう^{ママ}な収穫をもたらす討論会のこのような長所は、今日ひろく認識されてきているが、最初発足當時は、かならずしもこの程度の理解さえ

もあつたわけではない。一つは、討論會は、思想をスポーツ化するという反対論さえあつた。ところが坂西志保さんがアメリカやイギリスやに年久しい學生討論會について言っているように、「討論會は一つのゲームである。」「討論は一種の知的ゲームで、アメリカの室内遊戯の重要な一つである。」つまり、思索の判断の訓練、頭脳の訓練であり、辯論の練習であり、それを前提とする知的競技なのである。自己の抱く思想は一つであつて二つでないことは言うを待たない。しかしその思想を、より明らかにするためにも、反対の立場に立つて論駁しうる余地はないかどうかを研究する。また假りに反対の論據を用いて論じた場合、どのような理論をきずくことができるかを反省し工夫してみることによつて、その思想は、より全面的に検討されるであろうし、またその人の頭脳は、もつと緻密になるであろう。ふたたび坂西さんの言葉をひけば、「聴衆も自分たちに関係のあるものであるから、熱心に出てくる。問題の可否を論じている間に、その實體をつかむことができるから、専門家の講演よりも効果があるという。」このような訓練の意義も必要も理解しえないところから、眞理探究の辯證法を把あくしえないところから、また辯論そのものの意義も十分討論しないところから、右のような反対論も生じたのである。この二年間の経験は、逆に、學生に思想學問への刺戟をあたえ、その青年らしいアンビションに知的形態を提供した點で、討論會は、理論的方面において相當の寄與をなしていることを立證した。討論會としては、今後もつと経験を重ねた場合には、テーマについての立場をくじ引きにして、各自その割り當てられた立場で討論しうるところまで行くのが本當だとおもう。わたくし自身、自己の是なりと確信する立場に立つての討論でなければ、思想に忠實ならざる口舌の徒を養うことになるだろうというような気持ちであつたことをかえりみ、討論會というものの意味を十分理解していなかつたものを反省している次第である⁽²⁴⁾。

ここで鈴木は坂西が述べるゲーム型の理解を認めた上で、討論は単なるゲームという次元を超えて思考追求につながるとまとめている。したがって、「朝日討論会」の初期に存在した批判は、「このような訓練の意義も必要も理解しえないところから、眞理探究の辯證法を把あくしえないところから、また辯論そのものの意義も十分討論しないところ」から生じたものだという。

両論をまとめ、ゲーム性の先に思考の訓練を見る問題把握は重要である。しかし、この捉え方が指導者たちにどこまで共有されていたかは疑問である。

3 1990年代との比較検討

ここまでの議論は、第3の波といわれる1990年代以降から現代にかけてのディベート隆盛の時代にどのように受け継がれたのであろうか。

たとえば、1995年08月28日付けの「アエラ」に、「編集部 井原圭子」による次のような記事が

掲載されている。東京大学教育学部の藤岡信勝教授を中心とする「教室ディベート研究会」の活動を紹介した記事の一節である。

ディベート教育はこの一、二年、広がりを見せ、上祐氏の出現によって、知名度は飛躍的に上がった。しかし、黒を白と言いくるめる口先だけの人間を育てるものと短絡されるのが心配、と藤岡教授はいう。

「追及する側がディベートに不慣れだからだまされる。悪用する者が出てくるからこそ、論点を整理し、反論できるディベーターを育てなければ。ディベートをもってディベートを制す、です」⁽²⁵⁾

さらに、1995年11月29日「朝日新聞」に国際ディベート学会会長松本道弘が次のような文章を投稿している。

ディベートは日本でも最近、学校教育や自治体の研修に採用され始めた。ある研修会に招かれ「いじめはムラ現象かそれともマチ現象か」という論題を提案したところ、大いに盛り上がった。その結果、肯定、否定グループの勝敗レベルではなく、討議の過程の中で「いじめによる自殺は都会現象である」という事実を全員が発見し、共通の認識を得たことがある。

一方で「揚げ足とり」とか「勝敗にこだわる見戯に過ぎぬ」の批判、誤解も後をたたない。相手がいかなる詭弁（きべん）を用いても、正論で臨めば論破できるというのがディベートの妙である。オウム真理教の元外報部長の「ああ言えばじょうゆう」式の弁舌もしょせん詭弁であったことが露呈した。

ディベートは思考訓練や真理発見、問題解決に役立つ有力な手段である。具体的には主張を裏付ける客観的なデータの提示が求められ、論拠があいまいな説明や、相手に反ばくの機会を与えない強弁や詭弁は減点となる。言葉は知性であり論理であることへの信頼が、ディベートを不動のものとする。

ソ連崩壊で冷戦体制は終わり、とりあえず、世界大戦の危機は去った。しかし、国家、民族間の平和・相互理解の実現にはほど遠い。経済先進国として日本の役割、貢献が期待されている。だが、言葉不足ゆえの不信・誤解はなお残る。今、我々に求められているのは、言葉を武器にした「知的武装」であり「知的文化防衛」であろう。それは世界の平和と共存を目指すものである。

「理屈を言うな」が日本人の心情にある。生活の中にも言葉で意見を戦わせることを避ける風潮が見られる。若手世代と中高年世代のギャップも言葉・思想の緊張、やりとりがないことにある。

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極

「分かってくれるだろう」では分からない。いかに言葉を使い、論議を重ねるかが問われている。知的トレーニングの場としてディベートは最もふさわしい⁽²⁶⁾。

どちらもオウム真理教の事件を引き合いにしてディベートの有効性を主張しているが、「黒を白と言いくるめる口先だけの人間を育てるものと短絡されるのが心配」「「揚げ足とり」とか「勝敗にこだわる見戯に過ぎぬ」の批判、誤解も後をたたない」との批判に対して論を展開している点に、このような批判が多く寄せられていたことを逆に物語っている。

さらに、ここでの論の展開がやや強引であるということは、たとえば松本の文章中の「オウム真理教の元外報部長の「ああ言えばじょうゆう」式の弁舌もしょせん詭弁であったことが露呈した」との一節に表れている。なぜなら、上祐氏の弁舌が「しょせん詭弁であったこと」を露呈させたのは、国家警察・検察権力であり、「相手がいかなる詭弁（きべん）を用いても、正論で臨めば論破できるというのがディベートの妙である」とされるディベートではなかったからである。逆にいえば、少々強引な論を展開させてディベートの効用を主張しなければならないほどに、ディベートへの風当たりが強かったということであろう。

ここには、「朝日討論会」の企画を推進する人たちに存在した、ディベートの捉え方の対立が依然として繰り返されている。「朝日討論会」自体は1940年代末の運動であり、1955年にはその影響力をほとんど失ったとされている⁽²⁷⁾が、そこで見られたディベートの捉え方の対立は、現在にもほとんどそのまま残っているということである。オウム真理教の事件は、その対立が批判という形で大きく注目された時期であった。

4 まとめ

本論では、「朝日討論会」の企画を推進する側に、「討論」の定義に関して「思考追求型」と「ゲーム型」との二極があったことを指摘した。

すなわち、「朝日討論会」を理論的に指導し運営に関わった者の中に、討論を思考追求の一方法と捉える羽仁五郎や蠟山政道のグループと、「一つのゲーム」と捉える坂西志保や冠地俊生のグループとが存在したということである。この対立は討論という語の定義の問題にとどまるものではなく、「朝日討論会」という企画の目的にも関わるものである。やがてその対立は、この事業が継続していくにつれて表面に現れてくることにもなる。現実には、「朝日討論会」は1946年に始まり1950年に突然中止された。その理由はいろいろと考えられるが、もしもこの後も継続されていたとしても、指導者間における「討論」観の相違はやがて企画そのものの継続を困難なものとしたであろう。ただ、このようにディベートを二極に捉える姿勢は、現代にも尾を引く問題である。

ディベート・討論を「辯證法的な物の考えかた」の一つと捉える考え方は、試合そのものではな

くその試合への準備から終了後の考察をも視野に入れて捉えた場合に成り立つ考え方であろう。それに対して、ディベート・討論を「一つのゲーム」と捉える考え方は、試合そのものに重点をおいて捉えた場合に成り立つ考え方であろう。問題は、その両者が「討論」という同じ語でそれを表した点にある。冠地俊生が指摘したようにディベート・討論を「一つのゲーム」と捉える場合には、「試合討論（Competitive Debate）或いは討論試合（Debating Contest）」という語を用いたなら、両者の区別も付いたであろう。そのような区別をせずに同じ「討論」という語で両者を呼んだところに、問題が生じた原因があったのではないかと思われる。それは戦後初期という時代的限界でもあった。

しかしながら、先に引用したように、朝日新聞社がこの「討論」を「デモクラシーの技術的基礎」と位置づけたことは重要であり、指導者間の共通認識となっていた。したがって、この「朝日討論会」の形式による討論は、戦後デモクラシーの普及発展の度合いを象徴するものとなる。

今後の課題として、大学レベルで、高校レベルで、この「朝日討論会」の方式はどのように普及し、実践されていったのかを明らかにしたい。それによって、戦後初期におけるディベート運動を日本のディベート導入史に位置づけるとともに、これからの日本人の公共性育成に向けて、ディベート普及運動の可能性を探ることができよう。

注

- (1) 1946年12月9日6時30分からNHK第2放送にて、15分間放送された（同日の番組表より）。
- (2) たとえば、田村究『討論の研究』（徳峯社、1948年10月15日）、山川陽二『最新討論法読本 討論の進め方』（信友社、1953年1月15日）、石井満・牧博史『新討論の実例（その理論と要領）』（信友社、1954年10月30日）、長里清『式辞・挨拶 討論・會議 演説読本』（金園社、1955年3月10日）など。
- (3) 『新国語（改訂版）言語二』三省堂、1951年。
- (4) 冠地俊生「学生討論二十年を振り返る」、『戦後学生弁論の歩み』全関東学生雄弁連盟、1966年12月3日。pp. 130-131
- (5) ① p. 178
- (6) ① p. 178
- (7) ① 「はしがき」。執筆は朝日新聞社出版局
- (8) ① p. 68
- (9) ① p. 71
- (10) ① p. 72
- (11) ① pp. 72-74
- (12) ① pp. 74-75
- (13) ① p. 78
- (14) ① pp. 80-81
- (15) ④ 1947年12月2日
- (16) ① pp. 94-95
- (17) ① pp. 97-98
- (18) ① p. 104

朝日討論会（1946～50年）における「ディベート」観の二極

- (19) ③ p. 21
- (20) ③ p. 22
- (21) ③ p. 24
- (22) ③ p. 25
- (23) ③ pp. 164-165
- (24) ② pp. 86-88
- (25) 井原圭子「小学生が議論する 広がるディベート教育の輪」1995年08月28日『アエラ』朝日新聞社
- (26) 松本道弘「ディベートで知性を磨こう」1995年11月29日『朝日新聞』
- (27) 和井田清司「前掲論文」